



Title	マルガリータ・ヴォロビョヴァ=デシャトフスカヤ先生を偲ぶ
Author(s)	荒川, 慎太郎
Citation	内陸アジア言語の研究. 2021, 36, p. 129-131
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/86885
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

= 追悼文 =

マルガリータ・ヴォロビョヴァ=デシャトフスカヤ先生を偲ぶ

荒川 慎太郎*



中央：Маргарита Воробьёва-Десятовская 先生
向かって右：Надежда Носова 先生（2001年9月）

ロシア科学アカデミー・サンクトペテルブルグ東洋文献研究所 (Saint Petersburg Institute of Oriental Manuscripts of the Russian Academy of Science = IOM RAS) において、長らく中央アジア出土写本研究に従事されたマルガリータ・イオセフォヴナ・ヴォロビョヴァ=デシャトフスカヤ (Маргарита Иосифовна Воробьёва-Десятовская) 博士が、2021年6月13日逝去された。88歳だった。先生は、研究対象は異なるものの、小生が若輩の頃より近年に至るまで、同研究所の写本室で厚誼を頂戴した、恩師の一人にあたる方である。ここに心より追悼の意を表するとともに、小文を捧げたい。文中では敬愛を込めて「マルガリータ先生」と呼ばせていただく。

マルガリータ先生は、周知のごとく、インド・中央アジアの古代印欧語写本文献に精通した、著名な研究者であり、その学問的な貢献についてはご専門の近い方が論じることになるだろう⁽¹⁾。拙文では、先生と小生の関わり、個人的な思い出と先生のお人柄を述べておきたい。

* 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所准教授 (ARAKAWA Shintaro. Associate Professor at Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies)

(1) 先生の詳しいご経歴は、2005年12月までの著作リストとあわせて、IOM RASのWebサイトで紹介されている (http://www.orientalstudies.ru/rus/index.php?option=com_personalities&Itemid=74&person=79)。

先生とお会いしたのは、東洋文献研究所がその前身であるロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルグ支所 (St. Petersburg Branch of the Institute of Oriental Studies) であった 1990 年代後半、同所に所蔵される西夏語文献を調査した際だった。故庄垣内正弘先生の科研で、短期間ペテルブルグに滞在し、各種文献を実見する機会を得た。その時マルガリータ先生は「写本室」の室長であり、自身でも文献を出納されていた。

当時ロシア所蔵文献の調査は、斯界の権威であった故西田龍雄先生にも容易なことではなく、若輩の私は恐る恐るという感じで、庄垣内先生の渡航調査に同行させていただいた。文献所蔵先での「調査のしきたり」はそれぞれ異なる。庄垣内先生とマルガリータ先生は、同研究所での調査の「作法のイロハ」をご指導くださった恩師の方々といえよう。マルガリータ先生は、レニングラード国立大学（現在のサンクトペテルブルグ国立大学）東洋学部を卒業後、1956 年に研究所でお務めを開始され、1996 年から 2003 年まで、「写本室」の主任を務めた。つまり私が訪口した頃には相当のベテランだった。

当時の文献調査は（現在でもそれほど変わらない段取りだが）、事前に所長に文献調査の許可を得て、文献番号を「写本室」に連絡、保存状況などを見て、閲覧可能な資料が出納される。それを写本室近くの閲覧室に運んで実見調査する、という流れだった。1990 年代後期には、マルガリータ先生、エドワルド・チョムキン (Эдуард Наумович Темкин) 先生、ナデージダ・ノーソヴァ (Надежда Носова) 先生、タチアナ・パン (Татьяна Александровна Пан) 先生らに出納のお世話になった。写本室員の先生方は皆、博士号をお持ちの優秀な研究者であり、「くれぐれも粗相のないように！」と庄垣内先生に脅かされたのを覚えている。ロシア人の先生方は、最初はみな少々堅苦しく感じたが、その後交誼を結ぶと、親身に接してくださった。もちろんマルガリータ先生もそのお一人である。

私は 1999～2000 年にロシアに長期滞在し、後の博士論文で扱う西夏語仏典などを調査した。マルガリータ先生にもたびたび、出納でお世話になった。もう一つ、先生にお世話になったのは、毎日の「チャイ」である。毎日の調査の際、私の頭を悩ませていたのは論文や研究の進捗よりむしろ「お昼の空腹」であった。ロシア人の務め人は（現在はそう括れないのかもしれないが）、それほどしっかりと昼食を取らず、研究所員も、家から持参したパンやお菓子を、休み時間にちょっとつまむ、という程度であった。一方私は当時、昼もしっかり食べるタイプであった。その私が朝の 10 時くらいから文献を筆写したりしていると、無駄に燃料消費の激しいせいもあり、昼には空腹で苦しんでいた。そこでトイレに行く途中、こそこそパンを食べたりしていた。それを見かねたのか、写本室の先生方がお茶に誘ってくれた。写本室の奥の休憩スペースで、近所で購入したパン、時に自作のサンドイッチなどを恵んでいただいた。マルガリータ先生も気さくに、若輩の私を快く招いてくださった。

マルガリータ先生のお名前は、ロシア人特有の「父称」を別にしても、複合姓がなかなか長いもので、フルネームを記憶するのに苦労した。しかし、この印象的な姓（の男性形）は、ロシアの東洋学論集で時折目にするのがあった。この方（Владимир Воробьев-Десятовский）はもしかする

と先生のご親族かと考えていると、実はマルガリータ先生の、早世されたご夫君であった。その後、同所のチョムキン先生と再婚されていたということも知った。

前夫の先生のご不幸を知っていたのと、現在の旦那様のチョムキン先生ともチャイではご一緒することになるためもあり、マルガリータ先生とはプライベートの話をする機会はほとんどなかった。ご子息、お孫さんのお嬢さんがいるとのことだが、東洋学の方には進まなかったようだ。

2010年代には、マルガリータ先生は研究所をリタイアされていたものの、研究所のセレモニーには顔を出されていた。私が最後にお会いしたのは、東洋文献研究所で2016年1月に開催された

ワークショップだったように記憶している。久しぶりにお元気な姿を拝見できたものの、歩行が少し辛そうに感じられた。その後、2019年12月にチョムキン先生が亡くなられたと聞き、お寂しく過ごされているだろうな、と思っていた。

私が忘れられない先生のお姿を記したい。私の長期滞在中、さる高名な研究者（特定されないよういくつかの情報は伏せる）が文献調査のため、文献室を訪れ、貴重書を借りて閲覧室でこれを読み始めた。「調子に乗って」では済まない事なのだが、この学者はそのうち文献を床に広げて、デジカメでこれを撮影し始めたのだ。これほどの狼藉でも、その学者と所属機関との関係を考えると、写本室からは抗議できなかったのだろう。マルガリータ先生も、その学者には物申さなかったが、私にだけ聞こえるくらいの声で「ダメだ！ダメだ！」と繰り返していた。長年貴重な文献を管理していた責任者として忸怩たるものがあつたのだろう。あの時の悔しそうな先生のお顔が忘れられない。その後私は現在の職場で「文献資料担当長」を務めることになった。マルガリータ先生ほどの重責ではないものの、研究者の調査の基盤となる、資料の保安全管理の大変さを思い知らされた。そして、節度を以て資料を取り扱わねばならないことを一層自戒させられた。

先生はたびたび来日もされた。私が東京に勤めだしてからのことだが、東洋文献研究所の所蔵する各種言語の「法華経」公開の関わりで、マルガリータ先生は創価学会・東洋哲学研究所の招待で訪日し、講演など行われた（<http://www.totetu.org/lecture/2007/1.html> 参照）。この際に私も東京でお会いし、食事をお供した記憶がある。ロシアでのご厚誼に、私自身の差配によるご招待などでお返しすることが叶わなかったことが残念でならない。

マルガリータ先生への個人的な学恩は、もはや当人にお返しすることはできない。せめて今後、ロシア人研究者や私の受入による若手研究者に、学問的な協力を惜しまないことを先生にお約束し、追悼文の末尾としたい。

【付記】 本稿執筆に際しては、サンクトペテルブルグ東洋文献研究所写本室のキリル・ボグダノフ先生にも種々ご教示を賜りました。ボグダノフ先生にも深くお礼申し上げます。



左：故 Эдуард Наумович Темкин 先生
右：筆者（2001年9月）